

## 1 一つの時代の終わり

一つの時代が終わり、新しい時代が始まろうとしている、それが、今日の創世記第三五章です。

一つの時代の終わりは、イサクの死が告げられていることから明らかです。新しい時代の始まりは、ベテルで現れたイスラエルの神の託宣（一〇〜一二節）や、ベニヤミンが生まれ、ヤコブの十二人の息子の名が上げられているところなどに見ることができます。

アブラハムにつづくイサクの時代、この時代のことはいくつか、ここまで私も辿ってきてお分かりのように、イサクのことよりも、はるかに多く、イサクの子ヤコブのことを通して語られてきました。そしてそのヤコブについても聖書はいまや語り終えようとしています。

故郷カナンに二〇年ぶりに帰って来たヤコブ。帰郷の旅は、いよいよ最後にさしかかっています。

前の前の章、三三章から旅程を辿れば、こうです。ヤコブの一行は、ヨルダン川の東、スコトにしばらく滞在した（一七節）あと、ヨルダン川を渡り、ついにカナンの地に入り、シケムの町の近くに宿営します。天幕を張った土地の一部を買い取りますので（一九節）、そこにしばらくいたようです。

その後、シケムから南下し、ベテルに行きます——ベテルは後のエルサレムのすぐ近く、北に位置しています。ベテルに行ったのは、神の指示によるものでした（一節）。ベテルに着いたことは、六節にあります。詳しいことは、あとで取り上げますが、ベテルでしたこと、あったことが、三つ書いてあります。一つは、神が命じた通り、そこに「祭壇」を築いたことです。もう一つは、そこで母リベカの乳母デボラが死んで、これを葬ったことです。そして三つ目は、神がヤコブに現れ「祝福」し直接語りかけたことです。

しかしベテルが目的地ではありません。一同はベテルを出発します（一六節）。目指したのは父イサクの住むヘブロンでした。かつて父と母に見送られ、メソポタミアに逃れ、いまようやくよく戻ってきた。ベテルからヘブロンへ、これが三五章の伝える最後の道のりです。

この最後の旅路は、心にひっかかっていた兄エサウとの再会も、何とかしのぎ、帰心矢の如し、気持ちのはやる、足どりも軽い旅であったはずでした。しかしこの最後の旅はヤコブにとつて、何人もの人と、とり分け妻と死別するという、悲しみの旅路ともなったのでした。

まず聖書は、母「リベカの乳母デボラ」（八節）の死を伝えています。リベカがイサクに嫁いでくるさいに一緒に付いてきたことが、じつは前に書いてありました（二

四・五九)。

その彼女が、ヤコブ坊ちゃんが帰ってきたことで(二七・四五参照)、相当高齢だったにもかかわらず、ヘbronからベテルまで迎えに来たことが考えられます。そして彼女が最初に口にしたのは、母子ベカはもう死んだということではなかったかと思えます。実際リベカは、ヤコブが帰ってきたのに、聖書に出て来ないのです。二〇年離れている間母子ベカは亡くなり、ヤコブを育ててくれたに違いないデボラもここで亡くなるのです。デボラは近くの檜の木の下に葬られます。そしてその檜の木は「アロン・バクト」(嘆きの檜の木)と呼ばれるようになったとあります。ヤコブの深い嘆きと悲しみを伝えているようです。

## 2 妻の死、父の死

乳母デボラの死以上に、ヤコブにとって、つらい経験となったのは、愛する妻ラケルの死でした。

一同がベテルを出発し、エフラタまで行くにはまだかなりの道のりがあるときに、ラケルが産気づいたが、難産であった。ラケルが産みの苦しみをしているとき、助産婦は彼女に、「心配ありません。今度も男の子ですよ」と言った。ラケルが最後の息を引き取ろうとするとき、その子をベン・オニ(わたしの苦しみ)と名付けたが、父はこれをベニヤミン(幸いの子)と呼んだ(一六〇―一八節)。

エフラタまで「まだかなりの道のりがあるときに」という言葉からは、その時の何もできなかった絶望的な様子が伝わってくるようです。じつさい当時の旅の過酷さは私どもには想像を絶することです。だれもない、何も無い荒野を、妊婦も、動物たちと一緒に歩いて行くのです。

助産婦は、最初の子ヨセフと同じく男児であることを告げ、力づけようとしています。かつて、レアが次々子供を生むのに自分には生まれず、ラケルが男児の誕生を切に願ったことがあったからです(三〇・二四)。ラケルもかすかに思い出したに違いありません。しかし事態の深刻さは変わりません。彼女は、自分の苦しみを、生まれた子の名前として残そうとします。いまわの息の中で、ベン・オニ、(わたしの苦しみの子)と名付けようとしています。

しかしヤコブはこれをベニヤミンと呼んだとあります。(わたしの右の手の子)がもとの言葉です。それは(幸いの子)という意味を持ちます。この(幸い)とは何を指しているのでしょうか。その子の母は、つまり、ラケルは自分にとって幸いな存在であった、それを、ヤコブが、子の名前として刻みつけておこうとしたとも考えられます(四八・七を参照せよ)。それもありますが、やはりこの(幸い)は、母が死んで生まれた子自身の幸いを願ってということだろうと思います。もう一つの別れがありました。父イサクの死です。

イサクの生涯は百八十年であった。イサクは息を引き取り、高齡のうちに満ち足りて死に、先祖の列に加えられた。息子のエサウとヤコブが彼を葬った（二八〇・二九節）。

二〇年前、イサクが家督を譲ろうとしてエサウを呼び出したことが、エサウとヤコブの対立を生み出したことを、私ども知っています（二七章）。イサクは、あのときすでに年をとっており、目もかすんで見えなくなってきたとありました。あれから二〇年、私どもはもうとつくに亡くなっていたと思いがちですが、そうではなかったようです。妻リベカには先立たれましたが、高齡のまま、なお生きながらえていたようです。それは、ヤコブにとって、人間的には、カナンに帰ろうとした強い動機の一つであったかも知れません。イサクも、父アブラハムと同じく（二五・八）、「高齡のうちに満ち足りて死」んでいます。「満ち足りて」の中には、ヤコブと、最後に会えたことも含まれていました。

葬りは、エサウとヤコブがおこなっています。ちょうどアブラハムをイサクとイシマエルが葬ったように。

こうして神の民を率いるヤコブの責任が一段と重くなっていた矢先、またもやとんでもないことが家族内で起こっています（二二節）。それも聖書は、隠さずに書いています。長男ルベンが、父ヤコブの側女、ラケルの召し使いビルハと関係を持つていたということです。イスラエルの律法以前のことはいえ、むしろ許されることではありません。それがヤコブの耳にも入ったとあります。ヤコブが何かしたこととは、ここにはありません。ただ、ヤコブが、最後に、息子たちを呼んで「後の日」のこととして語る中で、ルベンは「長子の誉れを失う」（四九・四）と断言しています。それは神の隠れた裁きでありました。

### 3 神の約束の担い手として

身近な人が次々に亡くなり、身边に変化が生じてくる中で、ヤコブの、神の救いの担い手として選ばれているという自覚は、逆に、いっそう深くなって行ったのではないのでしょうか。

そうした観点から、私ども、もう一度この章のはじめに戻って、ベテルへと一族をともなつて上るヤコブ、そこで神の直接の語りかけを聞くヤコブに、目を向けたいと思えます。

ヤコブは神に命じられ、一族を引き連れて、ベテルに上ります。祭壇を造るために上ります。ベテルとは、神の家という意味だということは、すでに私どもも知っています（二八・一〇）。その神の前に出るに当たって、ヤコブは、一族の者に、次のように命じるのです。

「お前たちが身に着けている外国の神々を取り去り、身を清めて衣服を着替えな

さい。さあ、これからベテルに上ろう。わたしはその地に、苦難の時にわたしに答え、旅の間わたしと共にいてくださった神のために祭壇を造る」。人々は、持っていた外国のすべての神々と、着けていた耳飾りをヤコブに渡したので、ヤコブはそれらをシケムの近くにある檜の木の下に埋めた(二二〜四節)。

こうした箇所を読むと、この時代には、外国の神々、いわゆる偶像といったものがふつうに民の中に存在していたことが分かります。それがヤコブ一族の中にもあったのです。

今回のヤコブの学びで、ラバンのもとにヤコブが暮らしていた時のことは、取り上げませんでした(三〇〜三一章)、そこに、ラケル、すなわち、ラバンの娘ですけれど、ヤコブと一緒にラバンの家から逃亡するさい、父ラバンの「守り神の像」(三一・三〇)を盗んで持つて行くところがあります。探しに来て、ラケルは隠して渡しませんでした。そのように、ヤコブの家族の中にも、そうしてものが、入り込んでいたのです。「耳飾り」(イヤリング)なども、もともとそうしたものの一つであったようです。

他方、「身を清めて衣服を着替え」るなどのほかに、そうして神々の像を一掃してベテルの神の前に出なければならぬとしたヤコブはやはり特別の人、まさに神の人です。彼は十戒の第一戒と第二戒、すなわち、主なる神のみを神とし、他に何らの「像」を造ってはならないという戒めを先取りしています。神を信じる、信頼するとは、神だけを信じる、信頼することです。一切の夾雑物を捨て、信仰と信頼において純一でならなければならないのです。

さて先に、ヤコブは、神の救いの担い手として、その自覚を深めつつあったのではないかと申し上げました。ベテルで、神が現れ、神がいわば降りてきて(一三節を見よ)ヤコブに語りかけた、直接語りかけたことにおいて、それは強められたといつてよいように思います。

ベテルで現れた神は、アブラハム、イサクに与えられた祝福を継ぐのは、あなた、ヤコブだと語っています。いまやヤコブは、神の救いの計画の担い手として、名前もイスラエルになります(二二・二九)。そしてヤコブの子らが神の民イスラエルを形成していくことになります。

ただそれでも、神の思いとヤコブの思いと、異なっていることを指摘しなければなりません(イザヤ五五・九)。神は、もちろん長男のルベンでもなければ、ヤコブが愛したヨセフでもベニヤミンでもなく、ユダ族を通して、救いの業をなさったのです。そこからダビデも生まれたのです。神の業は確実になされます。しかし私どもには隠された仕方なされます。

しかしそうであるからといって、神が明らかに示した道を、私どもが歩むのを怠つていいということにはなりません。ヤコブが一族に呼びかけたように、私どもも身を清め、悔い改め、ただわれらの神、主のみを見上げて、信じ、従っていきたく願うものです。

(十一月二〇日)